機に投ず

光世証券
取締役社長　巽　大介

「しまだっ！」大きな掛け声がキーンと広い劇場の後方から舞台の方へと響き渡った。あれは私がまだ小学校低学年のことであったろうか？父に連れられて家族で初めて新国劇を観に行ったときのこと。

幼かった私にとって、それは緊張感のある、独特の、それまで経験したことのない時空間であった。

当時、ご縁があって父と親交があった島田正吾さんのご招待だったのであろう。

島田正吾さんは新国劇の大スター、辰已柳太郎さんとの二枚看板であった。

舞台を観るのがほとんど初めての経験であった私に、父は「お前も声をかけてみるか？」と言った。名場面で、大向こうから独特の節回しで掛かるあれである。元来、（関西弁で言うと）子供を“おちょくる”のが好きな父であった。しかし、その言葉を真面目に受けた私は、「ホントに言ってもいいの？」父は、笑いながら、「いいよ。」

さてそれからの私の胸中は大変な騒ぎであった。『言おうか?』、『言おうか?』と父に小声で聞き続け、何度も「しまだっ」と声を掛けようと決断しながらもうまく時と間が選べない。大声を出さなければ聞こえない、役者がしゃべっているときはだめだ…と、頭の中は声を掛けることで一杯であった。

よし、今度こそ！息を吸い込んだそのとき、無常にも幕となった。言おうと思っていたのに。とうとう声を掛けられず、何とも言えない敗北感のようなものが私を支配した。そんなわけで芝居の内容は全く覚えていないのであるが、演目はおそらく国定忠治であったろうか？今では笑い話のような思い出ではあるが、あれは我が人生における初めての挫折であったのかもしれない。このように折に触れ、父は私の勇気を試した。

光世証券の玄関に「投機」という書が掲げてある。立花大亀老師から創業者である父へ頂いた書であり直言である。この「投機」の書を見るにつけ、人生における決断のとき、またあるいはこの株を売るのか買うのか、まさに瞬間の判断を迫られるときなどに思い出す、私の幼き頃の思い出の一幕であり、自らへの戒めとしているエピソードである。

「投機」とは禅宗の言葉で修行者が師の心機に投合する、あるいは悟りを開くという意味があるそうだ。私はこの変革の時代をまさに「今だっ！」と機に投じて的確に生き抜いていかねばならないと意を強くするものである。

「実があるなら今月今宵、一夜明ければ誰も来る。」そんな心境だろうか。

大証と東証が統合し、新しい時代の幕開けがはじまった。震災で打ちのめされた日本を立て直す為にも、我々は良心と勇気をもって良い機を選んで、前へ前へと進んで行きたいものである。